

名馬に乗って万里を走る！

歳をとるほどに年が過ぎていくのが速くなる——誰もが実感する現象でしょうか？それとも自分だけなのかなあ？ 去年は巳年。年男ながらによろよると動くその動物は思い



っきり苦手でしたが、今年はパカッパカッと元気のよい駿馬がやってきました。

馬を十二支では「午」と書きます。知能は家畜の中ではかなり高く、常日頃から愛情を込め身の回りの世話をしてくれる人に対しては、信頼をよせ従順な態度をとる。大切にいつも可愛がってくれる人間の顔

(ウィキペディアから——Ctrl キーを押しながらクリックすると馬が走りだします) は生涯忘れないともいわれ、いくつかの逸話もあります。競馬の馬と騎手の関係もそんなところにあるかもしれません。

馬に関するこんな故事ことわざもあります。

「人間万事塞翁が馬」——高校のときの国語の教科書に出ていました。

昔、中国北方の塞(とりで)近くに住む占いの巧みな老人(塞翁)の馬が、胡の地方に逃げ、人々が気の毒がると、老人は「そのうちに福が来る」と言った。やがて、その馬は胡の駿馬を連れて戻ってきた。

人々が祝うと、今度は「これは不幸のもとになるだろう」と言った。すると胡の馬に乗った老人の息子は、落馬して足の骨を折ってしまった。人々がそれを見舞うと、老人は「これが幸福のもとになるだろう」と言った。

一年後、胡軍が攻め込んできて戦争となり若者たちはほとんどが戦死した。しかし足を折った老人の息子は、兵役を免れたため、戦死しなくて済んだという故事。

単に「塞翁が馬」ともいわれ、「人間」は「じんかん」とも読まれます。意味しているところは、「人生における幸不幸は予測しがたい。幸せが不幸に、不幸が幸せにいつ転じるかわからない。だからあまり不幸にくよくよするな、幸せに浮かれるな、安易に喜んだり悲しんだりするべきではない」といった教訓でしょう。

日蓮大聖人の仏法を信奉する私としては、これはもう一步前向きに「変毒為薬」につながっていきたいところです。「毒を変じて薬と為す」つまり起きた不幸を自然の流れに任すだけでなく、自分の意志と努力でそれまで以上の幸福な境涯に転じていくことです。

もう一つ「立正安国論」には「蒼蠅麒麟(そうようきび)に附して万里を渡り・・・」とあります。たった数メートルしか飛べない蒼蠅(あおばえ)も麒麟の尻尾について万里を走ることができるように、自分個人の力は小さくても世界的レベルで活動を進めるSGI(創価学会インタナショナル)の中にいれば、思いもしなかった人生の広がりや境涯を体験できる、ということです。

おりしも世界平和への新時代開幕の年。私も学会創立100周年(2030年)に向かい“見果てぬ夢”(広宣流布=仏法を基軸にした世界平和の構築)に再びの跳躍を決意しているところです。



ドン・キホーテの愛馬ロシナンテ=私の名刺のロゴになっています